

第5回外国語ワーキンググループについて

2016年1月12日に中央教育審議会教育課程部会の外国語ワーキンググループが開催された。

9:00から11:00まで文部科学省3F1特別会議室で行われた。
一般傍聴者は前回と同様、30～40名程度であった。

今回の議題は以下の通りである。

1. 外国語ワーキンググループにおける検討事項に関するこれまでの主な論点(案)について
2. 松本主査代理(立教大学)発表
「中学校・高等学校の指導の現状と改善の方向性」
3. 酒井委員(信州大学)発表
「中学校の改善の方向性について」
4. 中・高での英語教育についての意見交換

まずは議題1について、事務局より説明があった。

これまでの議論を踏まえて、論点がまとめられた。

「育成すべき資質・能力について」では、これからのグローバル社会に向けてどのような職業に就くとしても外国語教育が必要であり、「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能の総合的な育成や、コミュニケーション能力の向上が重要であると述べられている。

「外国語教育の改善について」ではCAN-DOリストを活用して小・中・高を通じた目標設定の重要性や、主に小学校での教科型の導入・短時間学習の活用について述べられている。

これに対し、委員より意見が述べられた。

ここで議論されたことが、現場の教員や生徒にきちんと伝わるように学習指導要領には分かりやすく具体性を持って記述すべきだとの意見があった。

また、特に教員養成の課題が重要視され、以前からこのことを見越して教員免許法の改正も含めて改善すべきと提言していたのに、まだ研修などで対応し続けている文科省へ苦言を呈する委員もいた。

これらの論点のまとめは小学校部会へと提出され、今後も相互連携しながら進められることになるそうだ。

次に、議題は小学校に関することから、中・高に関することに移る。

まずは、松本主査代理と酒井委員より発表があった。

松本主査代理は主に高校教育についてである。

4 技能を統合的に育成するために、新たな科目編成が提案された。

「論理・表現」を新設し、専門科目として「総合英語」「ディベート&ディスカッション」

「エッセイ・ライティング」などが考えられている。

酒井委員は主に中学教育についてである。

英語による授業は高校で徐々に取り入れられてきているが、これを中学校から始めるべきであるとの提案がなされた。これによってより英語に触れる機会を増やすことができるためという。

ただし、やはり教員養成が課題となり、小中の連携・中高の連携も重要な課題となる。

これに対し、委員より意見が述べられた。

教科書には指導書などが全て用意されていて、教師の工夫や勉強の意欲を下げているのではないかとの意見や、逆に、忙しすぎて準備不足になっているだけだから、きちんとしたガイドラインがあった方がいいなどの意見があった。

大方の委員は現在の教科書を「薄い」「トピックがバラバラ」「語彙が不足」など不満に思っているようで、力がつく教科書をきちんと作るべきだと考えている。

また、大学入試で4技能を見るようになれば教育の現場も変わっていくだろうと、入試改革に期待する声もあった。

次回は2月23日（火）10:00～12:00、文部科学省15階特別会議室にて開催予定である。

引き続き、中高における教育改善について議論される。